

青年期後期の友人関係と自我同一性の関連の検討

綿引 一貴

青山学院大学大学院 博士後期課程 1 年

Relationship between friendship and ego identity among adolescents

Kazuki Watahiki

Education, and Human Studies, Graduate School of Aoyama Gakuin University

Abstract

The relationships between friendship and sense of ego identity among university students were investigated using the Friendship Scale of Okada (2007) and the Multidimensional Ego Identity Scale (MEIS) of Tani (2001). Respondents were classified by cluster analysis to find patterns of friendship among adolescents. As a result, the adolescent group with inner friendship scores high in three dimensions of ego identity and was adaptive. On the other hand, the adolescent group with modern friendship (a group of adolescents who tend to avoid friendship and stay in themselves, and the other group of those who seek a smooth relationship while avoiding hurting themselves and others) and the adolescent group newly identified in this study (a group of adolescents who have a tendency to avoid friendship and remain private but do not avoid self-harm) were generally less likely to establish ego identity and maladaptive. However, in the adolescent group which aimed for the smooth relationship while avoiding the hurt of both self and others, the moderate score was shown in the dimension of "psychosocial identity".

Key Words: adolescence, friendships, ego identity

問題

青年期は子どもと大人の中間に位置する時期である。「青年期」は比較的歴史が浅く、産業革命を経た近代社会で誕生した社会的歴史的概念である（溝上，2010）。この時期は学校教育を通して子どもから大人になるまでの発達移行プロセス（溝上，2010）であり、身分制度の崩壊などから学校教育が職業選択の重要な要因となっていた。そのために子どもや若者が将来の職業を選択し、それに向けて努力する時期が得られることとなった（櫻井・佐藤，2013）。

青年期の区分については研究者によって多少の相違はあるが、生涯発達の視点から、青年期を、中学生期に相当する「青年期前期」、高校生期に相当する「青年期中期」、主に大学生期に相当する「青年期後期」の3期に分けて捉えることも多

い（二宮・大野・宮沢，2006）。

青年期では急激な身体変化に伴ってコントロール不能感がもたらされ、「自己への問い直し（精神分析家 Erikson, E. H. の言葉を借りれば、自我同一性（ego-identity）を形成・確立を目指すこと）」が行われるとされる（櫻井・佐藤，2013）。Erikson（1959；西平・中島訳，2011）によれば、自我同一性は「一方は、自分自身の斉一性（self-sameness）と時間の流れの中での連続性（continuity）を直接的に知覚すること。他方はそれと同時に、自分の斉一性と連続性を他者が認めてくれるという事実を知覚すること」である。また、青年は心理的離乳の途上にあり、親との関係は児童期のように密着したものではなくなっていく（落合・佐藤，1996）。親や教師にはもう頼りたくないという気持ちを持ちながら、自分にも自信が持てない

中で、青年が頼りにする相手や心を打ち明ける相手として友人が重要な役割を果たしてくる(落合・佐藤, 1996)。このことから、「自分の斉一性と連続性」を認めてくれるような他者として、友人が大きく関わってくることが考えられる。

Erikson (1950) は人間の心は生まれてから死に至るまでの人生周期(ライフサイクル (life cycle))を通じて発展し続けるものとし、8段階からなる漸成発達図式(epigenetic schema)を提唱した。各段階はその時期に余儀なくされる課題に向き合うことで心的発達に質的な変化が生じる。その意味で、各段階の発達課題は臨界点としての「危機(crisis)」の様相を帯びる。この図式において、青年期は第Ⅴ期にあたり、その発達課題は「同一性(identity)対 同一性拡散(identity diffusion)」であるとされている。また Erikson (1959) はアイデンティティが自己の内面への強い関心と、自分のライフサイクルの各段階における、重要な他者(significant others)との関わりを通じて形成されていき、その対象は、母親から親、家族、仲間、パートナーへと移行していくと指摘した。

自我同一性の研究は、1つの流れとして、Marcia (1966) にはじまる自我同一性ステイタス法があり、これは、主に面接法によって、同一性の状態を類型化しようとするものである。ステイタス法は、主に職業やイデオロギーに関する「危機(crisis)」と「コミットメント(commitment)」という2変数によって、4類型に分けるという方法である。谷(2001)によれば、ステイタス法では、Erikson が自我同一性概念の中核として仮定する自己の一貫性・連続性や、自己像に関する自他の認識などには焦点が当てられていないという問題がある。

自我同一性研究のもう一つの流れとして、尺度法によって自我同一性の程度を測定しようとする方法がある。これまで自我同一性尺度は、全般的な同一性の感覚を測定する項目から構成される尺度と、Erikson による心理社会的発達段階の各々の感覚を測定する項目から構成される尺度の2つに大別される(谷, 2001)。

前者の同一性の感覚の定義に基づく自我同一性

尺度としては、Dignan (1965)、加藤(1986)などによる尺度が代表的である。

一方、後者の Erikson による心理社会的発達段階に基づく自我同一性尺度としては、海外で使用頻度の高い Rasmussen (1964) による尺度が代表的なものとして存在し、国内ではその邦訳版として宮下(1987)の尺度がある。また、類似の尺度として、Rosenthal, Gurney & Moore (1981) による EPSI (Erikson Psychosocial Stage Inventory) およびその邦訳版(中西・佐方, 1993)、Ochse & Plug (1986) による尺度が挙げられる。

しかし、谷(2001)によれば、これまでの自我同一性尺度には、必ずしも Erikson の記述に一致しない項目がみられるとともに、同一性の感覚の下位概念設定についても、Erikson 理論との対応関係は明らかであるとは言い難い。その一方で、Rasmussen (1964) のように発達段階に基づく自我同一性尺度は、第Ⅴ段階の自我同一性の感覚と併存させて、他の発達段階における感覚を下位概念として設定しており、各発達段階において獲得される感覚を混在させ、測定する構成概念を不明確なものとしてしまっている(谷, 2001)。また谷(2001)は、第Ⅴ段階における同一性の感覚だけでも複雑な構成概念であり、単一次元からなるというよりも、多次元から考えるべきであると指摘している。

谷(2001)によれば、同一性の感覚の定義に基づく尺度は、複数の下位概念を事前に仮定しながらも、1次元構造として扱う尺度がほとんどであり(Dignan, 1965; 加藤, 1986)、発達段階に基づいた同一性尺度はいずれの尺度も各段階の因子的妥当性もしくは弁別性を確認できていない(宮下, 1987; 中西・佐方, 1993; Ochse & Plug, 1986; Rasmussen, 1964; Rosenthal et al. 1981 など)。

以上のように、谷(2001)は従来の自我同一性尺度は多くの問題を抱えているとし、Erikson 理論に基づき、信頼性・妥当性などの検討が詳細になされた、多次元から構成される新たな自我同一性尺度、多次元自我同一性尺度(MEIS; Multidimensional Ego Identity Scale)を作成し、青年期における同一性の感覚は4次元からなる構造

(①自己斉一性・連続性, ②対自的同一性, ③対他的同一性, ④心理社会的同一性)であることを示唆した。

青年期における友人関係は, 親密で内面を開示するような関係, あるいは人格的共鳴や同一視をもたらすような, アイデンティティの確認を援助するような関係(岡田(2007)はこれを「内面的友人関係」と称し, そのような友人関係をとる青年を「従来の青年観に合致する青年」と称した)が望まれ, これによって青年は新しい社会的地位が付与され, 新しい自己概念を獲得し, 健康な成熟が促進されるとされてきた(西平, 1990)。こうした関係は, 緊張や不安, 孤独などの否定的感情を緩和・解消する「安定化機能」, 友人との交流を通して社会的スキルが学ばれる「社会的スキルの学習機能」, 友人が自己の行動や自己認知のモデルとなる「モデル機能」などの機能を持つとされる(松井, 1996)。

一方で, 近年こうした内面的友人関係を避け, 友人から低い評価を受けないように警戒したり, 互いに傷つけ合わないよう, 表面的に円滑な関係を志向する傾向(岡田(1995)はこれを「現代的友人関係」と称した)が指摘されている(千石, 1991; 栗原, 1996; 大平, 1995など)。岡田(1995)は, こうした関係は, 表面的で快活な関係を求める傾向, 内面的関係を避ける傾向, 相手に気を遣う傾向に分類され, それぞれの特徴を強く持つ青年群(群れ関係群, 関係回避群, 気遣い関係群)がみられるとしている。

鐘・山本・宮下(1984)は, 自我同一性の確立の程度は, 他者との関わりの質(深さと広さ)を大きく規定するものであると述べている。また, 「自分を他者との間でどうつかんでいくか」と「自分が他者とどのように関わるか」という課題の中には, 「私は他者とどう異なるのか」という個性性をつかむことと, 「私というものは, 私にも他者にもある」という普遍性を, いかにして見出すかという本質的な問題がある(松下・吉田, 2009)。このように, 対人関係と自我同一性の確立には密接な関わりがあると考えられ, 青年期の対人関係の中心の一つは友人関係であることから, 青年期においては, 特に友人関係のあり方

と自我同一性の確立との関わりが深いと考えられる。特に「青年期後期」においては, 自我同一性の確立や他者との親密性を獲得すべき重要な時期であるとされ(松下・吉田, 2009), この時期を対象とした自我同一性の確立や対人関係に関する研究が数多くなされている。

青年期の友人関係・他者関係と自我同一性との関連を検討した研究としては, 宮下・渡辺(1992)や山本・岡本(2008)がある。宮下・渡辺(1992)は, 大学生を対象に, 現在・高校生の時期・中学生の時期の友人関係, 親子関係および教師との関係と自我同一性の関連について調査した研究である。そこでは, 男子においては父親や母親との関係が自我同一性の確立にとって重要な要因である一方で, 女子においては自我同一性との関連において友人関係が重要であることが見出された。また山本・岡本(2008)では, 親・青年関係尺度, 対人関係性尺度と多次元自我同一性尺度を用いて, それらの関係を検討した研究である。こちらでは, 大学生においては, アイデンティティは親子関係よりもむしろ対人関係に影響を受けることを示した。

青年期の友人関係・他者関係と自我同一性との関連を検討した研究の中で, 松下・吉田(2009)は, 友人関係のあり方と谷(2001)にて導き出された4つの自我同一性の次元のうちどの次元が関係しているかを直接検討したものである。松下・吉田(2009)では, 友人に気を遣う人や友人との深い関わりを回避する人は, 自我同一性の確立感が低く, 積極的に友人との快活な関係を求め, 自己開示する関わり方をする人は, 自己同一性の確立感が高いことが示された。しかし松下・吉田(2009)で友人関係尺度として用いたものは岡田(1995)の尺度であり, 岡田(1995)で用いられた「現代青年の友人関係の特徴を測定する尺度」は, 必ずしも安定した構造が得られないことが指摘されている(岡田, 1999; 片山, 2001)。そこで岡田(1999)はこれに再検討を加え, 「現代青年に特有な友人関係の取り方に関する尺度項目」(以下「友人関係尺度」と記す)を新たに作成した。本尺度の信頼性は岡田(1999)において確認されており, また岡田(2005)で友人に対する具体的行動との

間で相関がみられ、併存的妥当性が一部確認されている。岡田（2007）は岡田（1999）において、比較的負荷量の高い項目を解析に用いた。さらに因子負荷量の高い項目を中心に下位尺度名を見直し、改めた。

以上のことから、岡田（2007）の友人関係尺度と谷（2001）の多次元自我同一性尺度（MEIS）を用いて友人関係のあり方と自我同一性の確立について検討することは有用であると考えられる。

目的

大学生を対象に、岡田（2007）の友人関係尺度と谷（2001）の多次元自我同一性尺度（MEIS）を用いて、大学生の友人関係のあり方と自我同一性の確立の感覚にどのような関連があるのかを探索的に検討する。

方法

調査対象者

関東の大学に通う大学生。個別に調査協力を依頼して質問紙を配布した。回答に不備のあるデータを除外した。結果的に分析に用いたのは男性84名、女性159名、計243名、平均年齢は20.4歳（18歳から24歳、 $SD = 1.42$ ）であった。平均年齢に性差はなかった。

調査時期

2015年12月、2016年11月。

尺度

友人関係尺度（岡田，2007） 青年期の友人関係の特徴を測定する尺度であり、計35項目からなり、6件法での評定を求めた。内面的友人関係を避け、互いの内面に踏み込まないような関わり方を示す「自己閉鎖」、友人から自分が否定的に評価されないよう気をつかう関わり方を示す「傷つけられることの回避」、友人を不快にさせないよう気をつかう関わり方を示す「傷つけることの回避」、楽しく円滑な関係を取る「快活的関係」の4因子をもつ。

多次元自我同一性尺度（MEIS）（谷，2001） Erikson の提唱する発達段階の第Ⅴ段階である自我同一性の確立の程度を多方面から測定する尺度であり、計20項目からなり、7件法での評定を求めた。同一性の感覚における自己の不変性および

時間的連続性についての感覚を意味する「自己斉一性・連続性」、自己意識の明確さの感覚である「対自的同一性」、他者からみられているであろう自分自身が、本来の自分自身と一致しているという感覚である「対他的同一性」、現実の社会の中で自分自身を意味づけられるという、自分と社会との適応的結びつきの感覚である「心理社会的同一性」の4因子をもつ。

フェイス項目 フェイス項目として、性別、年齢、学年、学部を記入する欄を設けた。

結果

友人関係尺度の構造と信頼性の検討

項目19（友だちと同じ持ち物を持つ。）にフロア効果がみられたため削除し、その他の34項目の評定値をもとに因子分析をおこなった。その際、逆転項目については、1から7の評定値を7から1に逆転させる処理をおこなった。スクリープロットや岡田（2007）をもとに4因子を指定し、再度、主因子法、*promax* 回転による因子分析をおこなった。因子負荷量が.35以下の項目を削除し、再度因子分析を行った結果、6項目が削除され、第1因子8項目、第2因子10項目、第3因子8項目、第4因子3項目の計29項目が採択された（表1）。

第1因子は、すべての項目が岡田（2007）の「自己閉鎖」因子に相当しているため、「自己閉鎖」と名付けた。第2因子は、項目8（相手の世界に口出ししない。）、項目31（お互いのプライバシーに立ち入らない。）、項目11（相手の言うことに口をはさまない。）、項目14（相手に甘えすぎない。）が岡田（2007）では自己閉鎖因子の項目であったが、項目内容から友人を不快にさせないよう、傷つけないよう気を遣う関わり方を示していると読み取れるため、「傷つけることの回避」と名付けた。第3因子は、項目12（友だちから無神経な人間だと思われないよう気をつける。）を除く全項目が岡田（2007）の「傷つけられることの回避」に相当しており、項目12の内容も“友人から無神経な人間だと思われることで自分が傷つけられてしまうことを回避している”と考えられるため、「傷つけられることの回避」と名付けた。第4因子は、全項目が岡田（2007）の「快活的関係」

表1. 友人関係尺度の因子分析結果 (4因子解 主因子法 *promax* 回転)

		因子負荷量				
項目		F1	F2	F3	F4	
①「自己閉鎖」 $\alpha = .810$						
34.	*悩みごとを相談する。	.773	.072	-.163	.100	
30.	*落ち込んだとき話を聞いてもらおう。	.753	.020	-.223	.156	
35.	*自分の心をうち明けて話す。	.711	.018	-.000	-.078	
04.	*自分の内面に踏み込まれないように気をつける。	.687	.072	.227	.100	
33.	本当の気持ちは話さない。	.549	.026	.277	-.036	
27.	浅い付き合いにとどめる。	.431	-.078	.229	-.160	
32.	*友だちの心の支えになろうとする。	.413	-.319	-.083	-.184	
05.	あたりさわりのない会話ですませる。	.373	.090	.240	-.10	
②「傷つけることの回避」 $\alpha = .776$						
08.	相手の世界に口出ししない。	.185	.683	-.222	-.072	
25.	友だちの内面に土足で踏み込まないようにする。	.173	.579	-.000	-.027	
18.	相手に自分の意見を押しつけないようにする。	-.087	.561	-.078	-.075	
31.	お互いのプライバシーに立入らない。	.470	.556	-.056	.020	
07.	お互いの約束をやぶらない。	-.063	.552	-.040	-.045	
21.	友だちを傷つけないようにする。	-.223	.525	.100	.037	
11.	相手の言うことに口をはさまない。	-.042	.511	.074	-.249	
09.	相手の気持ちに気をつかう。	-.173	.487	.066	.118	
14.	相手に甘えすぎない。	.228	.424	-.100	.026	
15.	友だちに心配をかけないように気をつける。	.135	.389	.217	.157	
③「傷つけられることの回避」 $\alpha = .807$						
16.	友だちから傷つけられないようにふるまう。	.077	-.069	.719	-.005	
22.	仲間前で恥をかかないように気をつける。	.193	-.076	.684	-.052	
28.	友だちからどう見られているか気にする。	-.076	-.142	.681	-.045	
24.	友だちからバカにされないように気をつける。	.320	-.110	.664	.009	
12.	友だちから無神経な人間だと思われないよう気をつける。	-.091	.292	.510	-.047	
13.	友だちをがっかりさせないよう気をつける。	-.118	.240	.500	.158	
10.	友だちと意見が対立しないよう気をつける。	.00	.220	.452	-.066	
26.	友だちから「つまらない人」と思われないよう気をつける。	-.058	-.150	.423	.305	
④「快活の関係」 $\alpha = .811$						
02.	ウケるようなことをする。	.077	-.149	.021	.915	
03.	冗談を言って相手を笑わせる。	.064	-.100	-.053	.820	
01.	楽しい雰囲気になるようふるまう。	-.153	.193	-.007	.579	
因子間相関						
		F1	1			
		F2	-0.135	1		
		F3	-0.150	0.486	1	
		F4	-0.332	0.094	0.101	1

*がついている項目は逆転項目を示す。

に相当しているので、「快活的関係」と名付けた。
Cronbach の α 係数は、「自己閉鎖」が .810, 「傷つけることの回避」で .776, 「傷つけられること

の回避」.807, 「快活的関係」で .811 となり、高い信頼性が確認された。

MEIS の構造と信頼性の検討

表2. MEIS の因子分析結果 (4因子解 主因子法 *promax* 回転)

		因子負荷量					
項目		F1	F2	F3	F4		
①「対他的同一性」 $\alpha = .828$							
15.	*本当の自分は人には理解されないだろう。	.832	.047	.034	-.090		
19.	*人前での自分は、本当の自分ではないような気がする。	.740	-.000	.108	-.038		
03.	*自分のまわりの人々は、本当の私をわかっていないと思う。	.706	-.036	-.126	.010		
11.	*人に見られている自分と本当の自分は一致しないと感じる。	.629	-.083	.023	.100		
16.	*自分らしく生きてゆくことは、現実の社会の中では難しいだろうと思う。	.494	.177	.091	-.035		
20.	*自分の本当の能力を生かせる場所が社会にはないような気がする。	.435	.046	.205	.022		
②「心理社会的同一性」 $\alpha = .850$							
04.	現実の社会の中で、自分らしい生き方ができると思う。	-.046	.816	-.158	.205		
08.	現実社会の中で、自分らしい生活を送れる自信がある。	.125	.761	.008	.057		
12.	現実の社会の中で自分の可能性を十分に実現できると思う。	.020	.744	.044	.026		
07.	自分は周囲の人々によく理解されていると感じる。	.460	.568	-.217	-.026		
10.	自分のすべきことがはっきりしている。	-.126	.486	.441	-.078		
③「対自的同一性」 $\alpha = .849$							
18.	*自分が何を望んでいるのかわからなくなることがある。	.065	-.157	.829	.056		
14.	*自分が何をしたいのかよくわからないと感じるときがある。	.164	-.189	.760	.100		
06.	自分がどうなりたいのかはっきりしている。	-.072	.426	.622	-.211		
02.	自分が望んでいることがはっきりしている。	-.174	.417	.576	-.059		
17.	*「自分がない」と感じる時がある。	.058	.053	.515	.274		
④「自己同一性・連続性」 $\alpha = .860$							
05.	*過去に自分を置き去りにしてきたような気がする。	-.045	.092	-.041	.823		
01.	*過去において自分をなくしてしまったように感じる。	-.073	.040	.007	.812		
09.	*いつのまにか自分が自分でなくなってしまうような気がする。	.008	.091	.021	.750		
13.	*今のままでは次第に自分を失ってってしまうような気がする。	.208	-.043	.200	.541		
因子間相関							
		F1	1				
		F2	0.400	1			
		F3	0.350	0.560	1		
		F4	0.623	0.278	0.349	1	

*がついている項目は逆転項目を示す。

天井効果・フロア効果がみられなかったため、全項目の評定値をもとに因子分析をおこなった。その際、逆転項目については、1から7の評定値を7から1に逆転させる処理をおこなった。スクリープロットや谷 (2001) をもとに4因子を指定し、再度、主因子法、*promax* 回転による因子分析をおこなった。その結果、谷 (2001) とは異なり、第1因子6項目、第2因子5項目、第3因子5項目、第4因子4項目が採択された (表2)。

第1因子は、項目16 (自分らしく生きてゆくことは、現実の社会の中では難しいだろうと思う。)

と項目20 (自分の本当の能力を生かせる場所が社会にはないような気がする。) を除く項目が谷 (2001) の「対他的同一性」因子に相当しており、項目16、20の内容も“社会”と“他者”は切り離せない関係であり、「対他的」な側面を含むと考えられるため、「対他的同一性」と名付けた。第2因子は、項目7 (自分は周囲の人々によく理解されていると感じる。) と項目10 (自分のすべきことがはっきりしている。) を除く項目が谷 (2001) の「心理社会的同一性」因子に相当しており、項目7の内容は“周囲の人々”を“社会”ともとれ

表3. 友人関係尺度と MEIS との相関

MEIS \ 友人関係	自己閉鎖	傷つけることの回避	傷つけられることの回避	快活的関係
対他的同一性	-0.410 **	-0.009	-0.163 *	0.261 **
心理社会的同一性	-0.282 **	0.182 **	-0.015	0.289 **
対自的同一性	-0.103	0.116	-0.097	0.093
自己斉一性・連続性	-0.290 **	0.032	-0.191 **	0.184 **

* $p < .05$, ** $p < .01$

るし、項目10の内容は“自分のすべきこと”ということから“(自分が)社会ですべきこと”を想起することができ、これは「心理社会的」側面を含むと考えられるため、「心理社会的同一性」と名付けた。第3因子は、項目17(「自分がない」と感じることもある。)を除く全項目が谷(2001)の「対自的同一性」因子に相当しており、項目17の内容も確固とした自分を失っているという感覚から「対自的同一性」の側面を含むと考えられるため、「対自的同一性」と名付けた。第4因子は、すべての項目が谷(2001)の「自己斉一性・連続性」因子に含まれるものであったため、「自己斉一性・連続性」と名付けた。Cronbachの α 係数は、「対他的同一性」で.828,「心理社会的同一性」で.850,「対自的同一性」で.849,「自己斉一性・連続性」で.860であり、内的整合性における信頼性は十分に確認された。

単純相関

表3に友人関係尺度とMEISの相関を示す。「自己閉鎖」についてはMEISの「対他的同一性」との間での中程度の有意な負の相関関係がみられた($r = -0.410$)。そのほか、「自己閉鎖」－「心理社会的同一性」、「自己閉鎖」－「自己斉一性・連続性」の間に弱い負の相関がみられた(それぞれ $r = -0.282$, $r = -0.290$)。また、「傷つけることの回避」は「心理社会的同一性」との間に弱い正の相関がみられた($r = 0.182$)。「傷つけられることの回避」は「対他的同一性」、「自己斉一性・連続性」との間に弱い負の相関がみられた(それぞれ $r = -0.163$, $r = -0.191$)。また、「快活的関係」は「対他的同一性」、「心理社会的同一性」「自己斉一性・連続性」との間に弱い正の相関を示した(それぞれ $r = 0.261$, $r = 0.289$, $r = 0.184$)。

以上のことから、青年の友人関係の取り方の各下位尺度と自我同一性の確立感の各次元の間に、弱いながら正負の相関がみられることが示された。

友人関係のパターンによる回答者の分類

友人関係のあり方の特徴を検討するために、「自己閉鎖」「傷つけることの回避」「傷つけられることの回避」「快活的関係」の4尺度平均得点を変量として、階層型クラスター分析(Ward法)によって回答者を分類した結果、4クラスターが得られた。クラスター別の構成人数と、友人関係尺度の平均得点と標準偏差を表4に示す。

各クラスター間の男女比

クラスター間での男女比については有意な差がみられたため($\chi^2(3) = 31.01$, $p < .05$) (表7), Harbermanの残差分析を行った。その結果、第1クラスターには男性が有意に多く(男性の調整済み残差 = 2.4, $p < .05$)、第2クラスターには女性が有意に多いこと(女性の調整済み残差 = 2.0, $p < .05$)が明らかになった。

各クラスターの特徴

各クラスターの友人関係尺度およびMEIS得点の平均値を求め、クラスター間での一元配置分散分析の結果、MEISの「対自的同一性」下位尺度以外はクラスター間に有意な差がみられたためTukeyの検定による多重比較をおこなった(表4)。結果のプロフィールを図1に示す。

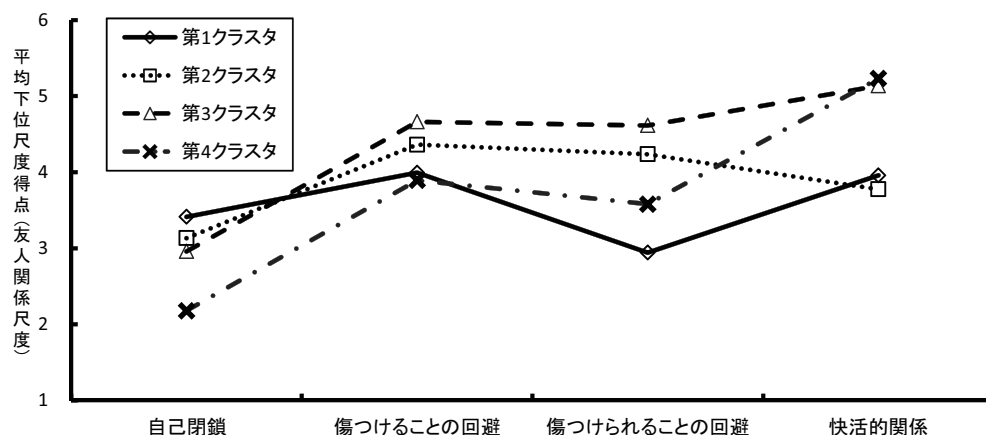
その結果、第1クラスターは、「自己閉鎖」得点が最大で、「快活的関係」得点が低い傾向がある。この特徴は岡田(1995, 2007)において指摘された、友人関係から回避し、自分にこもる傾向を有する青年にみられる。しかし、もう一つこのクラスターを特徴づけるものは「傷つけられることの

表4. 全回答者および各クラスターでの平均・標準偏差およびクラスター間での分散分析の結果

人数(男性, 女性)		全体 243 (84, 159)	第1クラスター 39 (20, 19)	第2クラスター 93 (30, 63)	第3クラスター 69 (17, 52)	第4クラスター 39 (17, 25)	F値 (上段) 多重比較結果 (下段)
[友人関係尺度]							
自己閉鎖	平均	2.963	3.413	3.132	2.958	2.177	$F(3, 239) = 30.357^{***}$ $4 < 3 \approx 2 < 1$
	SD	0.739	0.773	0.665	0.594	0.455	
傷つけることの回避	平均	4.307	3.992	4.361	4.662	3.893	$F(3, 239) = 22.212^{***}$ $4 \approx 1 < 2 < 3$
	SD	0.616	0.793	0.539	0.470	0.392	
傷つけられることの回避	平均	4.022	2.942	4.235	4.614	3.58	$F(3, 239) = 89.716^{***}$ $1 < 4 < 2 < 3$
	SD	0.800	0.601	0.476	0.484	0.738	
快活の関係	平均	4.442	3.957	3.774	5.135	5.23	$F(3, 239) = 78.927^{***}$ $2 \approx 1 < 3 \approx 4$
	SD	0.955	0.925	0.663	0.567	0.627	
[多次元自我同一性尺度 (MEIS)]							
対他的同一性	平均	4.097	3.966	3.832	4.077	4.841	$F(3, 239) = 9.472^{***}$ $2 \approx 1 \approx 3 < 4$
	SD	1.089	1.061	1.057	1.122	.791	
心理社会的同一性	平均	4.22	3.882	4.011	4.362	4.762	$F(3, 239) = 6.001^{**}$ $1 \approx 2 \approx 3 < 3 \approx 4$
	SD	1.146	1.266	1.054	1.076	1.144	
対自的同一性	平均	3.997	3.846	4.019	3.907	4.233	$F(3, 239) = 0.78$ $1 \approx 2 \approx 3 \approx 4$
	SD	1.279	1.254	1.232	1.321	1.34	
自己斉一性・連続性	平均	4.603	4.615	4.347	4.482	5.357	$F(3, 239) = 6.179^{***}$ $2 \approx 3 \approx 1 < 4$
	SD	1.334	1.296	1.338	1.34	1.095	

** $p < .01$, *** $p < .001$

図1. クラスター別の下位尺度プロフィール



回避」得点が最低である点である。つまり、友人関係から回避し、自分にこもる傾向を有しながら、自身が否定的に評価されることを回避するようには関わらないという、従来の研究では見出されなかった新たな一群といえるだろう。MEISにおいては、「対自的同一性」下位尺度を除くすべての得点において有意に低かった。

第2クラスターは、内面的友人関係を避ける傾向である「自己閉鎖」の得点が高く、「快活的関

係」得点は最低で、友人関係から回避し、自分にこもる傾向を有する青年と言える。岡田 (1995, 2007) においても同様の特徴を有する青年群が見出されており、次に述べる第3クラスターとともに現代の特徴の一つの型を示す群と考えられる。MEISにおいては、第1クラスターと同様に、「対自的同一性」下位尺度を除くすべての得点において有意に低かった。

第3クラスターは、友人関係尺度の「傷つける

ことの回避」「傷つけられることの回避」が4クラスター中最大で、「快活的関係」も高い値を示した。すなわち自他共に傷つくことを回避しつつ、円滑な関係を志向するなど、現代青年に特有な友人関係を取る群と考えられる。MEIS については、「対他的同一性」「自己斉一性・連続性」下位尺度の得点において有意に低かった。

第4クラスターは、「自己閉鎖」得点が高他の下位尺度の標準得点に比べ最小であった。すなわち、本クラスターは内面的友人関係を取る傾向が高いと言え、従来の青年観に合致する特徴を持つ群と考えられる。その一方で、岡田（2007）では「表面的関係を志向する」とされた「快活的関係」得点においても最大である。MEIS の得点を見てみると、「対自的同一性」下位尺度を除くすべての得点において有意に高かった。

考察

本研究では、大学生を対象に、岡田（2007）の友人関係尺度と谷（2001）の多次元自我同一性尺度（MEIS）を用い、大学生の友人関係のあり方と自我同一性の確立の感覚にどのような関連があるのかを検討した。

まず、本研究の分析において、友人関係尺度と MEIS のどちらもそれぞれ岡田（2007）や谷（2001）とは若干異なる因子構造が示された。両者とも下位尺度名を変更するほどの大きな相違はみられなかったが、各因子の α 係数が十分高いため、その後は本研究でみられた因子構造を用いて分析を行った。

友人関係尺度と MEIS の相関係数を算出したところ、友人関係の取り方のそれぞれの次元が、自我同一性の確立感の各次元に少なくとも一つは有意な相関がみられることが示された。

個別に見ていくと、「自己閉鎖」は「対他的同一性」「心理社会的同一性」「自己斉一性・連続性」との間に有意な負の相関を示した。このことから、互いの内面に踏み込まないような関わり方をする青年は、他者から見られている自分と本来の自分が一致せず、現実社会の中で自分自身を意味付けられず、自己の不変性や時間的連続性を持たない傾向にあることが示唆された。このことは、岡田

（2007）の「現代的友人関係」が自我同一性の確立の感覚を損なうという先行研究に一致する。

また、「傷つけることの回避」は「心理社会的同一性」に正の相関を示したため、友人を不快にさせないよう気をつかう関わり方をする人は、自分と社会との適応的な結びつきの感覚を持つ傾向にあることが示唆された。「傷つけることの回避」は元来、それが強い人は友人と深く関わることが出来ない因子として抽出されていたものの、心理社会的同一性においては正の相関があることは興味深い。このことは、円滑に友人関係をとることで自分が、友人関係の取り方に関わらず、自我同一性、特に心理社会的同一性の感覚を高める可能性を示唆する。

「傷つけられることの回避」は、「対自的同一性」「自己斉一性・連続性」との間に負の相関を示した。このことは、友人から自分が否定的に評価されないように気をつかう関わり方を示す人は、自己意識の明確さや、自己の不変性・時間的連続性の感覚に欠けていることを示唆する。「傷つけられることの回避」は「傷つけることの回避」と中程度の正の因子間相関を持っているにも関わらず、MEIS の各下位尺度との相関において結果が異なることは興味深い。このことは、「傷つけることの回避」と違い、「傷つけられることの回避」が円滑な友人関係を構築しない可能性を示唆する。

そして「快活的関係」は、「対他的同一性」「心理社会的同一性」「自己斉一性・連続性」との間に正の相関を示した。このことから、楽しく円滑な関係をとる人は、他者から見られている自分と本来の自分が一致している感覚、社会の中で自分自身を意味付けられる感覚、自己の不変性と時間的連続性の感覚を持つ傾向にあることが示唆された。

次に、友人関係のパターンによって回答者を分類したところ、岡田（2007）とは異なり、友人関係には4つの類型が見出された。内面的関係を取る青年（第4クラスター）は MEIS において全体的に適応的・成熟的な特徴がみられ、反対に現代的友人関係を取る青年（第2、第3クラスター）や本研究で新たに見出された青年（第1クラスター）は不適応的な傾向がみられた。このことから、傷

つくことを恐れ、友人に気を遣う関わり方や、友人との深い関わりを回避する友人関係を取る人は、自我同一性の確立感が低くなり、その一方で、積極的に友人との快活的な関係を志向する友人関係を取る人は、自我同一性の確立感が高くなるということが明らかになった。このように、先行研究（松下・吉田，2009）と一致する結果が示された。

第3クラスターにおいて、第4クラスターと同様に「心理社会的同一性」下位尺度の得点が中程度の値を示したことに関しては、「心理社会的同一性」が自分と社会との適応的結びつきの感覚を示しているということから、自他共に傷つくことを回避しつつ、円滑な関係を志向することで、友人関係という一つの社会と一見適応的に結びついているような感覚を得られるということが考えられる。しかし「対他的同一性」「自己斉一性・連続性」下位尺度得点の低さから分かるように、第3クラスターが決して適応的・成熟的な友人関係の取り方をしている青年群ではないということも同時にいえるだろう。

また、「快活の関係」得点の最も高い第4クラスターが、MEISにおいて高得点を示したことから、「快活の関係」下位尺度が決して「表面的関係を志向する」ことを示すとは限らないことが推測される。このことは松下・吉田（2009）が指摘しているように、「快活の関係」下位尺度が、「表面的な関係を求めるという側面ではなく、会話や触れ合いによる快活で積極的な関係を求めるという側面として抽出されている」と考えられる。

本研究で新たに見出された第1クラスターについては、岡田（2007）が「現代的友人関係」として指摘してきた、内面的友人関係を避け、友人から低い評価を受けないように警戒したり、互いに傷つけ合わないよう、表面的に円滑な関係を志向する傾向とは異なる。第1クラスターの人物像は、友人関係を避けて自分にこもりながら、友人から否定的な評価をされることを避けないという傾向を有している。すなわち第1クラスターの青年は、相手と円滑な関係を保つために、相手から否定的な評価をされたとしても自分が我慢すればよいという考えをもっているのではないかと考えられる。我慢という形で秘められた自己は友人との

関わりの中で表出しないために他に参照されず、MEISの得点の低さにも表れているように、同一性の獲得に失敗するのではないだろうか。

また、各クラスター間の男女比については、以下のような結果が得られた。すなわち、友人関係を回避し、自分にこもる傾向を有する第1クラスターは、男性が有意に多く、自他共に傷つくことを回避しつつ円滑な関係を志向する第3クラスターでは、女性が有意に多かった。この結果は、クラスター間での男女比に有意な差が見られなかったとする岡田（2007）の研究との相違点である。この男女差の背景を説明する要因の一つに、男女の友人関係のあり方の差異が考えられる。千石（1991）の男子・女子高校生の日記の調査では、「女子の元気さに対し、男子の元気がなさすぎる」「男子の交友関係は質量ともに貧しい」や「女子の友人関係では、時折感情的な記述があるが、男子は自分の性格や自分の評価もしないし、また、友人の評価も決してしていない」といった記述に現れているように思われる。すなわち、交友関係の貧しい傾向にある男子は自分にこもって友人関係をやり過ごそうとするが、一方で女子は自他が傷つかないように注意を払いながら自分の感情も上手く表出しつつ、円滑な友人関係を取ろうとする傾向にあるといえるのではないだろうか。しかしこのような、先行研究と異なる結果が示された要因には、本研究の分析における各カテゴリー間の度数に有意な差があり（ $\chi^2(3) = 31.81, p < .001$ ）、必ずしも分析に適したデータとはいえないことは無視できない。

MEISの「対自的同一性」下位尺度得点についてクラスター間の差がみられなかったことに関しても、「確固とした自分」や「自己意識の明確さ」が友人関係の取り方とは異なる要因によって規定される可能性があるほか、各カテゴリー間の度数の有意な差が関係していることが考えられる。

今後の課題として、得られた各カテゴリーからそれぞれ何人が抽出して面接調査を行い、彼らの友人関係の取り方や心理的発達に関するより詳細な知見を得ることが望まれる。また、友人関係だけでなく対象関係（object relations）のような、対人関係に影響を与えるより広い概念を取り扱う

ことで、より普遍的に対人関係と個人の成熟の度合いを探究することには意義があるだろう。

謝辞

本研究論文を作成するにあたってご指導いただいた青山学院大学教育人間科学部心理学科教授の平山栄治先生に心より御礼申し上げます。

文献

- Dignan, M. H. (1965). Ego identity and maternal identification. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1, 476-483.
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and Society*. W. W. Norton. (仁科弥生(訳) (1977). 幼年期と社会 I・II みすず書房)
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York: W. W. Norton & Company. (西平直・中島由恵(訳編) (2011). アイデンティティとライフサイクル)
- 加藤 厚 (1986). 同一性測定における2アプローチの比較検討 心理学研究, 56, 357-360.
- 栗原 彬 (1996). 優しさの存在証明—若者と制度のインターフェース— 増補新版 新曜社
- Marcia, J. E. (1966). Development and validation of ego identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.
- 松下姫歌・吉田愛 (2009). 大学生における友人関係と自我同一性との関連 広島大学心理学研究, 9, 201-216.
- 宮下一博・渡辺朝子 (1992). 青年期における自我同一性と友人関係 千葉大学教育学部研究紀要, 40, 107-111.
- 溝上慎一 (2010). 現代青年期の心理学—適応から自己形成の時代へ— 有斐閣選書
- 中西信男・佐方哲彦 (1993). EPSI エリクソン心理社会的段階目録検査 上里一郎(監修) 心理アセスメントハンドブック 西村書店 pp. 419-431.
- 二宮克美・大野木裕明・宮沢修次 (2006). ガイドライン生涯発達心理学 ナカニシヤ出版
- 西平直喜 (1990). 成人になること：生育史心理学から 東京大学出版会
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達の变化 教育心理学研

究, 44, 1, 55-65.

- Ochse, R., & Plug, C. (1986). Cross-cultural investigation of the validity of Erikson's theory of personality development. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 1240-1252.
- 岡田努 (1995). 現代大学生の友人関係と自我像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 4, 354-356.
- 岡田努 (1999). 現代青年に特有な友人関係の取り方と自己愛傾向の関連について 立教大学教職研究, 9, 29-39.
- 岡田努 (2005). 現代青年の友人関係・ライフイベントと自己の発達に関する研究 金沢大学文学部論集行動科学・哲学篇, 25, 15-32.
- 岡田努(2007). 大学生における友人関係の類型と、適応及び自己の諸側面の発達の関連について パーソナリティ研究, 15, 2, 135-148.
- 大平 健 (1995). やさしさの精神病理 岩波書店
- Rasmussen, J. E. (1964) The relationship of ego identity to psychosocial effectiveness. *Psychological Reports*, 15, 815-825.
- Rosenthal, D. A., Gurney, R. M., & Moore, S. M. (1981). From trust to intimacy : A new inventory for examining Erikson's stages of psychosocial development. *Journal of Youth and Adolescence*, 10, 525-537.
- 櫻井茂男・佐藤有耕(編) (2013). ライブラリストンダード心理学 スタンダード発達心理学サイエンス社
- 千石 保 (1991). “まじめ”の崩壊：平成日本の若者たち サイマル出版会
- 谷 冬彦 (2001). 青年期における同一性の感覚の構造—多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成— 教育心理学研究, 49 (3), 265-273.
- 鐘幹八郎・山本 力・宮下一博 (1984). 自我同一性の展望 ナカニシヤ出版
- Waterman, A.S. (1993). Developmental perspectives on identity formation: From adolescence to adulthood. In J. E. Marcia, A. S. Waterman, D. R. Matterson, S. L. Archer, & J. L. Orlofsky(Eds.), *Ego identity: a handbook for psychosocial research*. New

York: Springer-Verlag. pp. 42-68.

山本彩留子・岡本裕子 (2008). 大学生の親に対する態度・行動とアイデンティティ, 対人態度の関連性 広島大学心理学研究, 8, 107-120.